

情報入手と情報発信に関わる諸課題の解決に向けた基礎的研究

—目的と意識に着目して—

Basic research toward resolution of various issues related to information dissemination
and access to information

—Focusing on purpose and awareness—

中山 愛理¹

¹大妻女子大学短期大学部国文科

Manari Nakayama¹

¹Department of Japanese Language and Literature, Otsuma Women's University Junior College Division
12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan 102-8357

キーワード：情報入手，情報発信，情報アクセス

Key words : Gathering of information, Transmission of information, Information access

抄録

高度情報社会において、情報機器の所有状況やその活用状況が情報収集や情報発信といった情報活用に大きな影響をもたらしている。情報収集と情報発信をスムーズに行っていくための方向性を検討するためには、情報収集者と情報発信者の立場をシームレスに捉えていく必要がある。本稿では、こうした課題をふまえて、情報収集者としての意識、情報発信者としての意識を明らかにすることを目的とした。3大学の学生を対象とした質問紙調査の結果から、インターネットを活用し情報収集と情報発信を行っていることが確認された。今回の調査から、回答者の意識は、情報収集をしている意識は高いが、情報発信をしている意識は低く、無意識的に情報発信をしてしまっている可能性が確認された。

1. はじめに

ネットワーク環境が整えられた高度情報社会は、一見すると容易に情報収集ができるとともに、情報発信することも可能になったようにもみえる。しかし実際は、ハード、ソフトの両面で情報機器への依存が高まっており、必要な情報を容易に得ることができる者とできない者とが顕著化し、人々の間に情報獲得の質や量、情報発信手段に関して大きな格差が立ちはだかっている。

そうした、情報機器の所有状況の問題とともに、情報にかかわる者の意識も情報とのかかわり方に影響をもたらしている。

以上をふまえて、人々が情報収集及び情報発信をスムーズに行うために、必要となる諸条件を明らかにするための望ましい方向性を検討することが重要と考えられる。

2. 研究動向と本研究の目的

2.1. 研究動向

情報を入手する立場(情報収集者)と情報を発信する立場(情報発信者)の双方について、それぞれ一方の側面に焦点をあてた研究はこれまでも数多く存在する。

情報収集については、災害情報の収集に焦点をあてた「災害コミュニケーションとリアルタイム情報収集」^[1]やインターネットや図書館などを活用した情報収集に焦点をあてた「手術を勧められた若年子宮頸がん患者のインターネットによる情報収集行動に関する一考察」^[2]のような情報収集手段に焦点をあてた研究がある。このほかに情報収集を支援するシステムの構築に焦点をあてた「安否確認のためのTwitterを活用した情報収集システム」^[3]や人的コミュニケーション体制の改善による情報収集に焦点をあてた「食物アレルギー

に対する学校での対応と情報収集システムの構築」^[4]のような研究が存在する。

情報発信については、数多くの研究蓄積が存在するが、その多くが企業や地域団体などによる情報発信に焦点をあてた研究であった。個人による情報発信について焦点をあてた研究は「インターネットによる情報発信とメディア選択：個人と小集団を中心に」^[5]や「個人による情報発信時代の『普及モデル』の再吟味と発展」^[6]などがあり、情報ネットワークを活用した情報発信を前提とした研究成果となっている。

情報収集と発信の双方を連続する関係として捉えたものは、情報リテラシーの分野で言及された成果が存在する。例えば、情報収集から発信・伝達のサイクルにおいて、情報収集が不完全で断片的であることが多い点、検索された情報の信頼性や利用価値は必ずしも保障されない点、入手済み情報がその後に入手した情報に否定される可能性のある点をふまえて、入手した情報に基づく、情報の処理・活用・表現を行う情報発信学習の方法を提案する研究がある^[7]。こうした研究は、情報収集者と情報発信者の立場が並立する状況を明らかにするものである。しかし、双方の立場を人々が情報に関してどのように意識しているのかに焦点をあてた研究は管見の限り確認できず、これまでほとんど取り組まれてこなかった。

2.2. 研究目的

本研究は、情報を収集する立場と情報を発信する立場の双方が並立する状況下で、片方の立場だけでなく、双方の立場を人々が情報に関してどのように意識しているのかに焦点をあてることで、これまでの先行研究で扱われてこなかった情報収集者としての意識、情報発信者としての意識の現状調査を行うことを目的とした。

3. 調査対象と方法

3.1. 調査対象と時期

調査は、本学(A 大学)のほか、首都圏の4年制女子大学(B 大学)および、東北地方に所在する共学の短期大学(C 短期大学)で、司書課程や司書教諭課程などの授業を履修する学生を主な対象とした。本学の回答者には、短期大学部の1年、2年および学部3年、4年生が含まれている。調査対象者に対し、質問紙は無記名のため、協力者個人を特定することができない点と本調査への協力と成績評

価が無関係である点を明示した。

3.2. 質問紙の内容

質問紙は、回答者の属性と情報機器の利用状況とその目的の2つの部分から構成をした。

回答者の属性については、性別、所属学科、学年、居住形態、情報機器の所有状況、図書館の利用頻度、1年間に読む本の冊数、1年間に視聴するDVDの数の項目であった。情報機器の利用状況とその目的は、インターネットの利用頻度、インターネットに接続する情報機器、インターネットを利用する目的、インターネット以外の情報収集手段、インターネット以外の情報発信手段、情報収集の際に重視している事項、情報発信の際に重視している事項のほか、自由記述として情報収集について困っていると感じている点、情報発信について困っていると感じている点の項目であった。

4. 結果

4.1. 回答者の状況と結果の集計

A 大学での有効回答数は、データの不備等4件を除く96件(n=96)であった。B 大学の有効回答数は、データの不備等2件を除く、9件(n=9)であった。C 短期大学の有効回答数は、データの不備等3件を除く35件であった。なお、今回の回答者のほぼすべてが、女子学生であったことを考慮し、C 短期大学のデータから男子学生の回答5件を除き、女子学生の回答データのみの30件(n=30)で集計した。

今回の調査では、サンプル数が少ない学年・大学も存在するため、統計的処理による分析をそのまま行うことが妥当ではないと判断し、調査したデータの一部データを単純集計した結果を報告することにした。なお、サンプル数が少ないため、学年別の集計は行わず、大学別の集計とした。

4.2. 情報機器の所有状況

情報機器の所有状況(図1)については、いずれの大学においても、PC、テレビ、スマートフォンの所有率が高い傾向であった。一方、タブレット端末を所有する割合は、13%(A 大学、C 短期大学)もしくは0%(B 大学)と低い傾向であった。

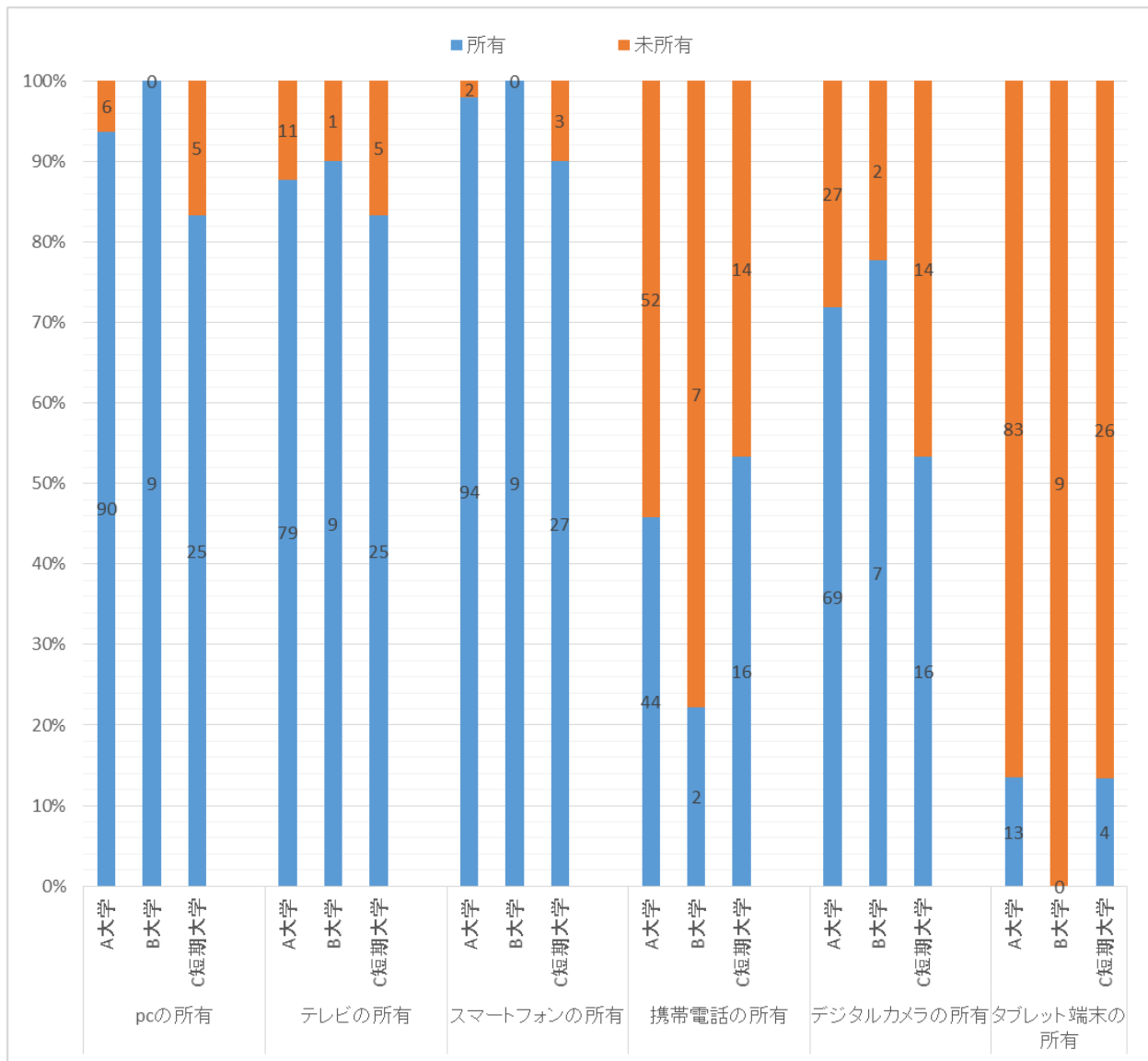


図1. 情報機器の所有状況

表1<インターネットの活用頻度>

	A 大学	B 大学	C 短期大学
毎日	70	5	20
週 3-4 日	18	3	6
週 1-2 日	7	1	4
ほとんど利用しない	1	0	0

(人)

表 2<インターネットの利用目的>

	A 大学	B 大学	C 短期大学
ニュース	65.6%	66.6%	53.3%
天気予報	66.6%	66.6%	53.3%
スポーツの結果	16.6%	22.2%	16.6%
地図を見る	47.9%	55.5%	43.3%
言葉の意味や事柄を調べる	73.9%	66.6%	76.6%
他人の twitter やブログ、ホームページなどを見る	86.4%	100%	86.6%
自分の twitter やブログ、ホームページなどを更新する	41.6%	55.5%	66.6%
買い物や予約をする	59.3%	88.8%	56.6%
ネットオークションに参加する	13.5%	11.1%	6.6%
友人・知人と LINE などでの情報のやり取りをする	87.5%	88.8%	93.3%

* 複数回答

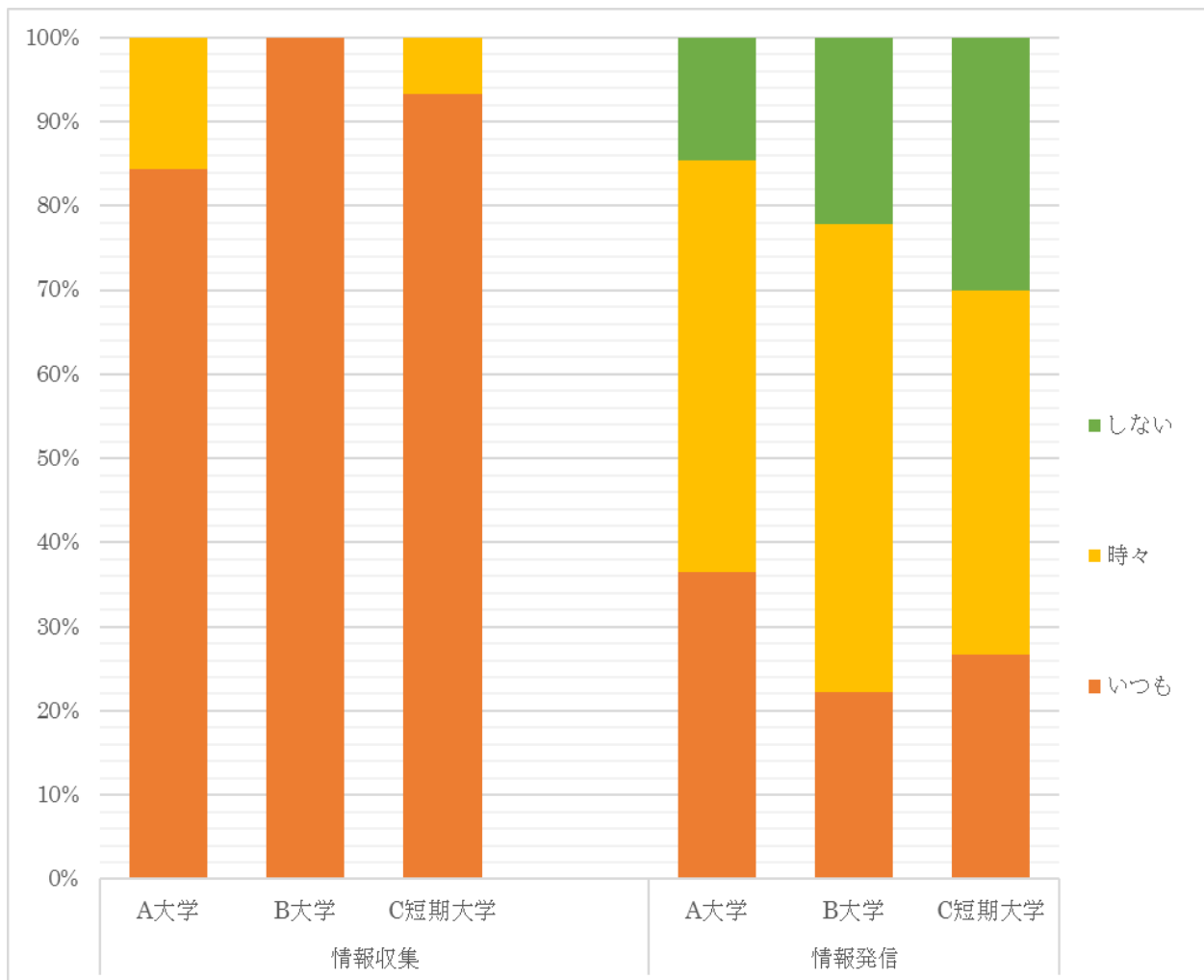


図 2 インターネットに対する目的意識

4.3 インターネットの利用状況

インターネットの利用状況(表 1)は、いずれの大学も半数以上が毎日利用しており、他の回答者も週に 1 日以上活用する者がほとんどであった。なお、「まったく利用しない」と回答した者は、いなかった。

4.4 インターネットの利用目的

インターネットをどのような目的で活用しているかを調査したところ、表 2 のような結果になった。いずれの大学もニュースや天気予報、言葉の意味を調べるなどの情報収集を目的とした利用が 53.3%から 76.6%の幅で半数以上であった。さらに、他人の twitter やブログ、ホームページなどを見ると回答した者はいずれも A 大学 86.4%、B 大学 100%、C 短期大学 86.6%と高い割合であった。一方、自分の twitter やブログ、ホームページなどを更新するといった情報発信については、A 大学 41.6%、B 大学 55.5%、C 短期大学 66.6%といずれも情報収集行動に比べると少なかった。

また、友人・知人と LINE などでの情報のやり取りをする者は、A 大学 87.5%、B 大学 88.8%、C 短期大学 93.3%であった。

4.5 インターネット利用に対する目的意識

インターネットの利用に対する目的意識を頻度で調査したところ図 2 のような結果となった。

情報収集に対する意識について、A 大学ではインターネットを情報収集することを意識して利用する者がいつも 84.4%、時々 15.6%であった。B 大学は、全員がいつもと回答した。C 短期大学は、いつも 93.3%、時々 6.7%であった。

情報発信に対する意識について、A 大学ではインターネットを情報発信することを意識して利用する者がいつも 36.5%、時々 49%、しない 14.5%であった。B 大学は、いつも 22.2%、時々 55.6%、しない 22.2%であった。C 短期大学は、いつも 26.7%、時々 43.3%、しない 30%であった。

5. 考察

今後、詳細な分析と検討を行う必要があるが、以上の調査結果をふまえてみれば、10 代後半から 20 代前半を中心とする女子大学生の情報機器所有状況とインターネット活用状況、インターネットの利用目的、インターネットに対する目的意識に

は同じ傾向があると考えられる。

また、情報収集と情報発信の双方を目的としてインターネットを利用しているにもかかわらず、意識としては、情報発信に対する意識をしていない者もいることが確認された。つまり無意識的に情報発信をしてしまっている可能性が考えられる。

今後、情報発信の行為の頻度と情報発信に対する意識の間の相関関係をさらに継続的に調査・分析していく必要があると考えられる。

付記

本研究は大妻女子大学人間生活文化研究所 共同研究プロジェクト(K102)の助成を受けたものである。

引用文献

- [1]松本直人. 災害コミュニケーションとリアルタイム情報収集. 情報処理学会研究報告. IOT, [インターネットと運用技術]. 2014, (25), p. 1-3.
- [2]氏原恵子. 手術を勧められた若年子宮頸がん患者のインターネットによる情報収集行動に関する一考察. せいいい看護学会誌, 2011, 2(1), p. 15-19.
- [3]京兼正和ほか. 安否確認のための Twitter を活用した情報収集システム. 電子情報通信学会技術研究報告 = IEICE technical report : 信学技報, 2013, 113(277), p. 7-11.
- [4]佐久間瑞恵ほか. 食物アレルギーに対する学校での対応と情報収集システムの構築. 茨城大学教育学部紀要. 教育科学, 2012, 61, p. 299-317.
- [5]加藤光. インターネットによる情報発信とメディア選択: 個人と小集団を中心に. 情報文化学会全国大会講演予稿集, 2000, 8, p. 15-17.
- [6]青木孝次. 個人による情報発信時代の「普及モデル」の再吟味と発展. 商学研究科紀要[早稲田大学]. 2008, 66, p. 77-92.
- [7]濱泰裕. 教科情報における Web を利用した情報発信の指導の改善に関する研究. 日本教育工学会研究報告集, 2005, 05(4), p. 37-42.

Abstract

In the advanced information society, the use of status and ownership status of information equipment has brought a significant impact on the use of information such as information dissemination and information gathering. In order to examine the direction of the order to go to go to the smooth transmission of information and the availability of information, it is necessary to capture seamlessly position information of the caller and information collectors. In this paper, we purpose to that in the light of these challenges, and to clarify awareness of information as caller, the consciousness of as acquirer of information. The results of a questionnaire survey of students of two universities and college, and being performed provide information and information collected by using the Internet has been confirmed. However, awareness of respondents, higher consciousness that the information collected, but consciousness you have information transmission is low has been confirmed.

(受付日 : 2014 年 6 月 15 日, 受理日 : 2014 年 6 月 24 日)

中山 愛理 (なかやま まなり)

現職 : 大妻女子大学短期大学部国文科専任講師

筑波大学大学院図書館情報メディア研究科博士後期課程修了

専門は図書館情報学. 現在はアメリカにおける公共図書館のマイノリティに対するサービスに焦点をあてた研究を行っている.

主な著書 : 図書館を届ける (単著, 学芸図書)